

靴の歴史散歩 ⑦④

皮革産業資料館 副館長 稲川 實

靴業界にとって重要文化財の宝庫ともいふべき西村記念室の収蔵資料を、「靴の歴史散歩」⑥③から11回にわたって連載してきたが、貴重な資料が数多くあって、今だにうれしい誤算が続いている。

さて、ご紹介するのは、旧日本陸軍草創期に刊行された、まことに珍しい二冊の製靴教本である。

『靴工科教程書』（明治25年、22.4cm×15.2cm）

『靴工科教程書 附録』（サイズ同上）

上記の資料は、今回精読する時間がとれなかったもので、内容は後日に託し、存在の確認のみでお許しをいただきたい。

被服廠確立以前の製靴教本ということもあって、間違いなく稀少本といえる。

『皮革産業沿革史 上巻』（東京皮革青年会 昭和34年刊）に〈軍靴の量産化と陸軍被服廠〉という項がある。そこに「明治二十三年（1890）陸軍は、陸軍被服工長学舎を設立し、軍人を学生・生徒として、陸軍監督補 藤村盛義を舎長に、軍靴の製造研究に着手し『製靴木型』を定めていた。後略」とある。

靴工科教程書を開けると〈緒言〉の頁があって、「明治二十五年一月」と発行年の記載がある。なんとそこに、陸軍被服工

長学舎と読める朱の角印が、れいれいしく押されてあった。

これによって、皮革産業沿革史の記述も裏付けられるし、この本が、被服工長学舎の教科書であったことも確認されたことになる。過ぎ去った歴史にライトを当て、新しい発見でもしたような、そんなうれしい気持ちである。

このあと陸軍は、明治35年（1902年）西村勝三の桜組に、製靴工場の建築設計と機械選択の一切を依頼、被服廠直轄の工場を持つに至るのである。

話が後先きになったが、被服廠とは、軍服や軍靴、軍用品などの生産、調達を担当し、またそれを備蓄する施設である。

かつての軍隊には、華々しい兵科の陰にあって、軍靴の修理や補修を専門に扱う装工兵とよばれる技術職の兵士がいたことはあまり知られていない。あえてこのこともひと言書き記しておきたい。



陸軍被服本廠の製靴工場（昭和初期）